

研究紀要

第23号

- 埼玉県における周溝墓出土の底部穿孔壺について
—坂戸市木曾免遺跡の事例を中心に— 篠田泰輔
- 比企地域における方形周溝墓の土器配置と群構成 福田 聖
- 綴じ合わせ構造をもつ樋部倉矧壁板の意義 山本 靖
- 武蔵国形成過程の構造 赤熊浩一
— 8世紀の郡家の瓦を中心に—
- ふじみ野市内出土石製品の鉱物分析 高崎直成 大屋道則
- 真脇遺跡出土の玉髓質泥岩類とその産地
高田秀樹 大安尚寿 砂上正夫 古西里美 大屋道則
- 石器材料及び石器の理化学的分析値(3)
— XRFによる黒曜岩分析値(2007年度)—
大屋道則 上野真由美 高崎直成 国武貞克 古西里美 田村 隆

2008

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



01 talk



02 talk



03 不明



04 不明



06 talk



07 talk



05 muscovite



08 talk



09 talk



10 tremolite



11 tremolite



12 tremolite



13 tremolite



14 tremolite



15 tremolite



16 tremolite



17 tremolite



1-1 禄剛崎から川浦での傾斜（東西方向）



1-2 禄剛崎から川浦での傾斜（南北方向）



1-3 真脇遺跡出土の玉髄質泥岩



1-4 禄剛崎と横山の間地点遠景



1-5 禄剛崎横山中間地点の円礫産状



1-6 禄剛崎横山中間地点採取の円礫（1）



1-7 禄剛崎横山中間地点の円礫（2）



1-8 禄剛崎横山中間地点採取の黄鉄鉱塊



2-1 横山の硬質な泥岩の産状



2-2 横山採取の硬質な泥岩



2-3 横山海岸西端の玉髄質泥岩の産状



2-4 横山海岸西端の玉髄質泥岩礫産状



2-5 横山海岸西端採取の玉髄質泥岩



2-6 横山海岸西端採取の海緑石(?)を含む岩石



2-7 前川採取の硬質な泥岩



2-8 珠洲市内採取の小ぶり石

目次

序

- 埼玉県における周溝墓出土の底部穿孔壺について 篠田泰輔 (1)
— 坂戸市木曾免遺跡の事例を中心に —
- 比企地域における方形周溝墓の土器配置と群構成 福田 聖 (13)
- 緩じ合わせ構造をもつ樋部倉矧壁板の意義 山本 靖 (47)
- 武蔵国形成過程の構造 赤熊浩一 (65)
— 8世紀の郡家の瓦を中心に —
- ふじみ野市内出土石製品の鉍物分析 高崎直成 大屋道則 (89)
- 真脇遺跡出土の玉髓質泥岩類とその産地 (95)
高田秀樹 大安尚寿 砂上正夫 古西里美 大屋道則
- 石器材料及び石器の理化学的分析値 (3) (115)
— XRFによる黒曜岩分析値(2007年度) —
大屋道則 上野真由美 高崎直成 国武貞克 古西里美 田村 隆

比企地域における方形周溝墓の土器配置と群構成

福田 聖

要旨 大宮台地、武蔵野台地北部では弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、方形周溝墓に用いられる土器は、周溝墓群としてのまとまりを強く意識した製作、配置が行われている。弥生時代後期前半の様相が不明瞭な関東地方にあって、比企地域は方形周溝墓導入から最終段階までの推移を辿る数少ない地域である。弥生時代中期から古墳時代前期の代表的な方形周溝墓群を検討した結果、大宮台地同様の土器使用と配置が行われていることが明らかになった。方形周溝墓は、「群」を強く意識した墓制といえるのかもしれない。また、古墳時代前期の広面遺跡SZ9は群集する墓域全体に大きく規制を与えるものであるが、ブロックの単位そのものやそれらの土器配置を否定するのではなく、墓域全体に規制されているとも捉えられ、こうした大型墳墓の性格を良く示していると考えられる。このような群を中心とした周溝墓群の造営集団は、同世代のまとまりで、かつ夫婦を単位としないものであり、出自集団のような集団である可能性が考えられる。「群」を中心とする周溝墓の造営は形象埴輪を用いる埴輪祭式が本格化する古墳時代中期まで続き、それが社会のあり方を反映するものであるならば、その時期に何らかの変革が予想される。

1. はじめに

筆者はこれまで、方形周溝墓における土器配置の様相について、大宮台地のさいたま市井沼方（弥生時代後期後半）（福田2007 a・b）、蓮田市久台（古墳時代初頭）（福田2007 c）、武蔵野台地の東京都練馬区丸山東遺跡（古墳時代初頭）（福田2007 a）について検討を行ってきた。

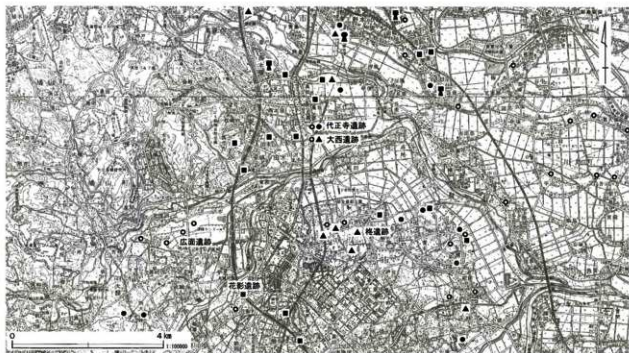
これらの周溝墓群においては、個々の周溝墓において用いられる土器に共通性が見られ、また異なる周溝墓で出土した土器の間にも共通性が見られるものがある。この共通性は、土器使用に群を意識した同時性があることを示している。また、特定の周溝に集中する傾向があることから、土器配置には正面観があり、それを更新することによって群が形成されている。前稿では、造営の最終段階の複数基の正面が、先程の共通する土器を用いて群全体を表示していると評価した。こうした状況から、方形周溝墓は親子を軸とするような累代墓ではなく、同世代のまとまりとしての「集団墓」であると考えられる。

しかし、そうした状況は、大宮台地、武蔵野台地の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての敷遺跡で確認したに過ぎない。このような群を強く意識した方形周溝墓の造営はどの程度の継続性と空間的な広がりがあり、一般的なものと異なるのであろうか。

本稿は、その継続性について確認する作業の一環として、関東地方の弥生時代後期前半の様相が明らかでない中において、地域の様相を連続的に知ることのできる埼玉県東松山市、坂戸市を中心とする比企地域を対象に土器配置と群構成という視点から方形周溝墓とその出土土器について検討を試みようとするものである。

2. 比企地域における土器配置と群構成

比企地域では、弥生時代中期後半（宮ノ台式）の東松山市代正寺遺跡（鈴木1991）、弥生時代後期前半（岩鼻式）の終遺跡（加藤・坂野2001）、弥生時代後期後半（吉ヶ谷式）の花影遺跡（谷井1974）、古墳時代前期（五領式）の広面遺跡（村田1990）で、群構成ま



第1図 遺跡位置図 (S=1:100,000 ●宮ノ台式、▲岩鼻式、■吉ヶ谷式、○五領式)

で知ることができる周溝墓群が報告されている。以下では、各遺跡の土器の出土状況と配置、出土土器の共通性と差異性について検討する。更に、それに基づいた群構成を考えることにしたい。

(1) 代正寺遺跡 弥生時代中期後半(宮ノ台式)

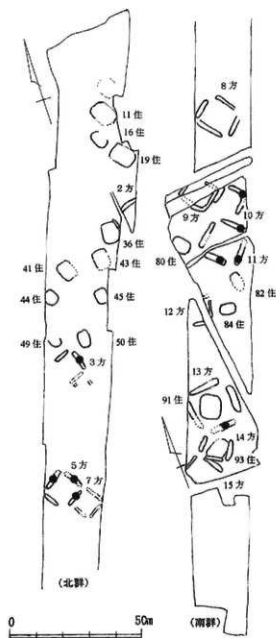
代正寺遺跡(第2図)からは14基の方形周溝墓が検出されている。出土状況の詳細については「方形周溝墓と土器Ⅰ・Ⅱ」(福田1995・2004、以下土器Ⅰ・Ⅱと略述)で述べたところなのでそちらを参照いただきたい。ここでは、まず出土土器の様相について確認し、その後土器に関する所見とこれまでの記述を合わせて土器配置と群構成の様相について検討することにした。

出土土器 第3～5図は出土土器を掲載したものである。壺、小型壺、無頸壺、甕、高環、甗が出土し、総点数は73点に及ぶ。出土土器は、1号が古墳時代前期の五領式、4・6号が弥生時代後期前半の岩鼻式で、それ以外は宮ノ台式である。ここでは宮ノ台

式のものについて扱うが、型式論的な前後関係は認められないと考えられる。

これらの土器には井沼方遺跡で見られたような、周溝墓専用の土器として製作されたと考えられるほどの共通性は見られない。土器は全体的に橙色がかっており、外面が荒れているものが多い。第5号周溝墓5・8は法量が近似しており、9号周溝墓1も同様であることから、この三者は共通するものとして取り扱われた可能性がある。また3号周溝墓3や10号周溝墓10は器高が70cmにも及ぶ超大型壺で胎土も精選された秀麗なものである。こうした壺も周溝墓用に用意された可能性があるだろう。3・5・9号、いずれも同一の群ではなく、離れて位置しており、上述のような出土土器の様相が遺構間の関係を示すものであれば興味深い。

このように、例えば出土土器種は差がなくても、用いられる壺の法量に大きな差があれば、出土土器の道具立ての違いが既に弥生時代中期から始まっているとすることができよう。ただし、専用の土器の製作



第2図 代正寺遺跡の遺構分布と土器
(柿沼2007を改図・転載)

までは至っていないようである。

土器配置 第2図には各周溝墓の土器の出土位置を示した。土器Ⅱで述べたところだが、代正寺遺跡では特定の周溝から土器が集中して出土する傾向が窺える。このことは、土器を入れる、あるいは置かれた土器が見られる方向を意識した「正面」があることを示している。こうした正面観があることを前提

とするならば、他の周溝墓に隣接する周溝に土器を入れるのは物理的にも難しいことから、土器が配置されている側に隣接する周溝墓はその周溝墓の方が後から造られたと考えられる。

方形周溝墓の分布をもう一度見ると、路線幅のため確実ではないが、2、3、5・7、8、9～11、12、13～15号の七つのまとまりがあるのが分かる。

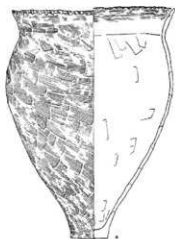
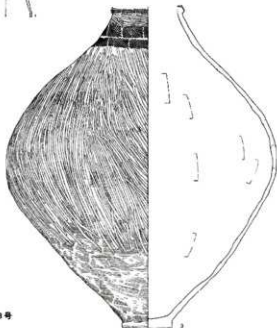
5・7号は、5号の北・南・東溝に壺を中心に土器が配置されている。5号の南溝に7号の北溝が連結することから、5→7号の順に築造されたと考えられる。群としては北側を意識しているのであろうか。

9～11号では、10号で14が底面から、5・10が中層から出土している。11号では北溝の東側、東溝の南側、南溝の東側といった遺構の東側を中心に、上層から最上層にかけて出土している。築造順序は配置からは明らかでないが、10号が西溝を欠くものであることから、11号が先行するものと考えられる。また9号は10号に連結し、11号の隅に合わせていることから最後に築造されたものと思われる。10・11号の土器配置は群全体に関わるもので、東側を意識しているものと思われる。

13～15号では、13号の南溝から10の高坪が下層から出土している。15号の壺の出土位置は不明である。14号は北溝を欠き、南溝が15号と連結し、13号と15号をつなぐような位置にあることから最も新しいと考えられる。また15号は13号の土器配置を継ぐ位置にあることから後出するものと思われる。13→15→14の順序が考えられる。

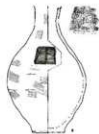
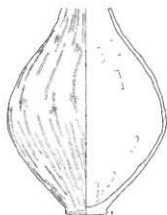
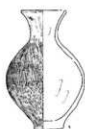
次に単独のものだが、3号は東溝中央の下層から壺が出土している。5号も遺構の東側を意識していることから、北東側の竪穴建物群の方向へ向けて土器配置が行われているようである。8号は図示し得る土器が出土していない。12号は壺底部のみが出土

代正寺2号



代正寺3号

代正寺5号



代正寺9号



代正寺12号

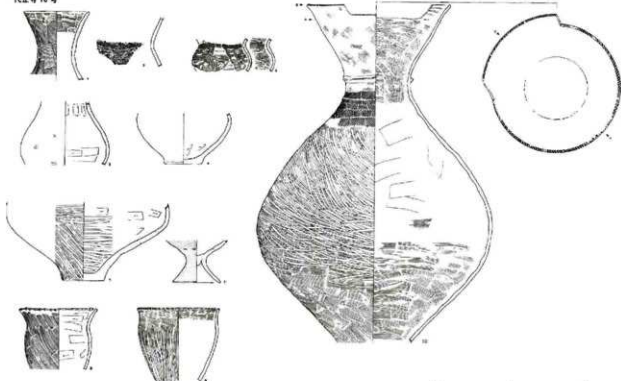


代正寺15号

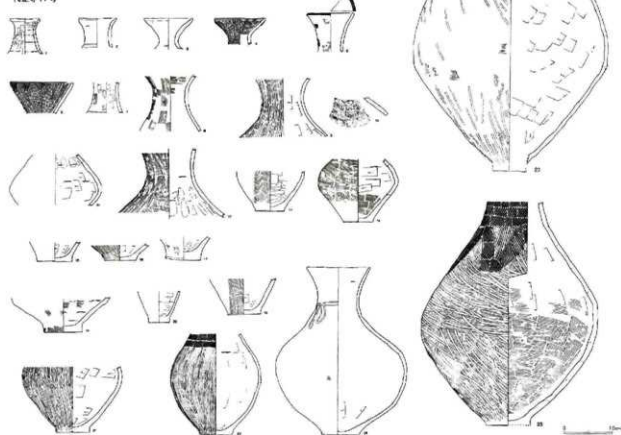


第3図 代正寺遺跡出土土器(1) (報告書より転載)

代正寺10号

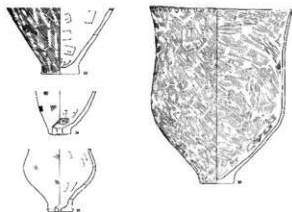
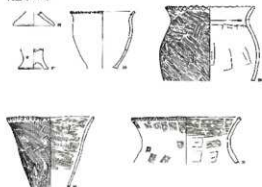


代正寺11号

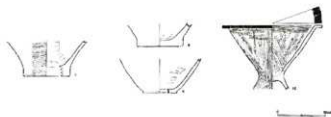


第4図 代正寺遺跡出土土器(2) (報告書より転載)

代正寺11号



代正寺13号



第5区 代正寺遺跡出土土器 (3) (報告書より転載)

している。

以上のように、代正寺遺跡においては、大型壺や法量の揃った土器など、方形周溝墓用に詠えた可能性のある土器が認められる。また土器配置からは、群の内部における築造順序が窺えとともに、群全体に対する配置にもなっていることが分かる。

(2) 終遺跡 弥生時代後期前半 (岩鼻式)

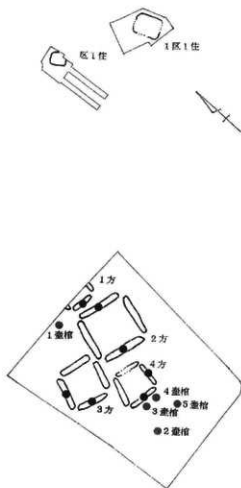
坂戸市終遺跡 (第6~11図) は埼玉県内でほとんど明らかになっていない弥生時代後期前半の方形周溝墓の様相が窺える遺跡である。越辺川右岸の坂戸台地北端近くに位置し、遺跡の南側と東側を越辺川支流の谷治川が北流している。

方形周溝墓は4基検出されている。同時期の土器棺墓も5基検出され、周溝墓と土器棺墓が一つの墓域を構成している。墓域は調査区の北側に延びており、基数も更に増えるものと思われる。平明形はい

ずれも各辺が直線的な周溝で、四隅切れである。

1号は調査区の北側に位置し、遺構の南側が調査されたのみである。方台部の規模は東西9.7mで、調査区内では最小である。2号の北溝2mの位置に南溝が位置する。周溝底面は平坦である。周溝覆土は自然堆積で、溝底にロームブロックを主体とする層が一部にあるが、方台部の崩落土とは言い難い。1~3層には焼土粒子が含まれている。

遺物は調査された南溝から多く出土している。複数の時期の破片が出土しているが、本周溝墓に關係する時期のものはごく少なく、壺1、甕1、鉢2点である。いずれも上~中層の、1層の暗褐色土と2層の褐色土の層理面からの出土である。覆土は方台部の崩落土によらないものと考えられることから、周溝埋没途中に納められた可能性が考えられる。前述のように南溝から多く出土することから、南側が「正面」として意識されている可能性が高い。



第6図 終遺跡の遺構分布と土器配置
(柿沼2007を改図・転載)

2号は調査区のほぼ中央、1号の南側に接して位置する。方台部は南北16.5m、東西17.0mの長方形で、調査区内で最大である。周溝底面は平坦である。覆土は基本的に自然堆積と考えられる、ロームブロックを多く含む部分も見られるが方台部の崩落土と断定はできない。2・3層に焼土粒子が含まれている。

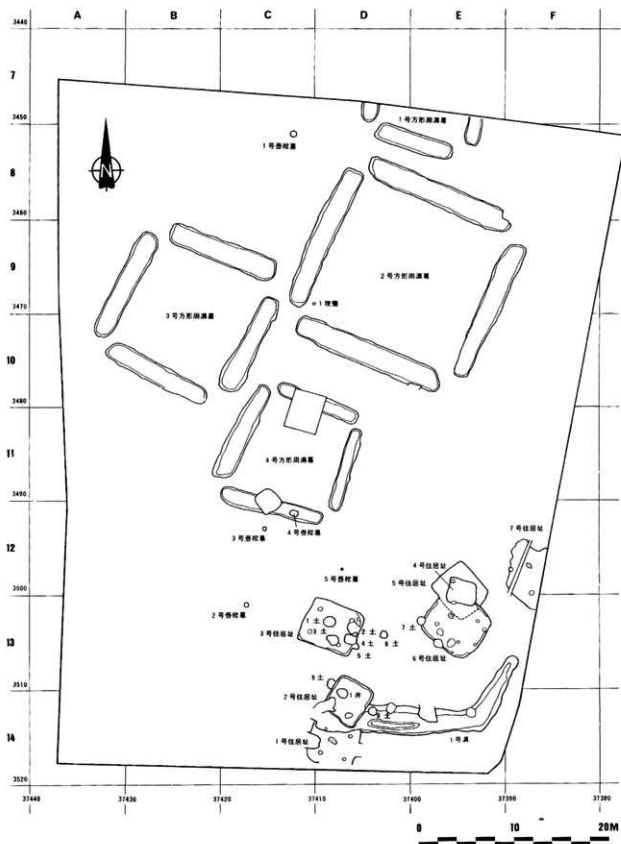
遺物は壺・甕が出土している。層的には周溝底面、もしくは若干浮いての出土である。南溝からは、13の壺が溝底から横転した状態で、4の大型壺の破片と12の甕がそれから2mほど東側の底面から土圧に潰された状態で出土している。北溝からは1の

大型壺が底面より若干浮いて出土している。また、南溝を中心に、中層以上からは古墳時代前期の土器がまとめて出土している。完形の高坏22も含まれており、本周溝墓に伴うものと考えられる。2号周溝墓においては造営時の弥生時代後期前半のものが周溝掘削直後に納められ、それに加えて周溝が半ば埋没した状態で古墳時代前期のものが納められたと考えられる。相当長い期間墓として意識されていたものようである。いずれも、南溝を中心に出土することから、南側が土器を入れる、見られる「正面」と考えられる。

3号は調査区の中央西側に位置し、北東隅を1号の南西隅に合わせて造られている。方台部の規模は南北12.7m、東西12.7mの正方形で、2・4号のほぼ中間の規模である。周溝の底面は、北・南溝は平坦で、東・西溝は中央が緩やかに深くなっている。覆土は基本的に自然堆積と考えられる、溝底や壁際にロームブロックを多く含む部分も見られるが、方台部の崩落土とは断定できない。周溝の内周、外周にともに認められることから、むしろ壁の崩落土である可能性が高いのではないだろうか。

本周溝墓に伴う遺物としては、甕5点、鉢1点、ミニチュア鉢1点があげられる。西溝(3・6)と南溝(1・5・7)を中心に出土している。いずれも中層のローム土を含む暗褐色土中からの出土で、周溝埋没途中に入れられた(納められた)ものと考えられる。西・南側が土器を入れる、見られる「正面」と考えられる。

4号は調査区のほぼ中央に位置し、西溝が2号の西溝の延長線上に位置する。方台部は10.3×10.6mのやや歪んだ正方形である。規模としては、ほぼ1号と同様で、本遺跡の中では小型である。2・3号同様に西溝が長く、東溝が短い。周溝の底面は3号同様に、北・南溝は平坦で、東・西溝は中央が緩や



第7図 終遺跡2区全測図 (報告書より転載)

図1号

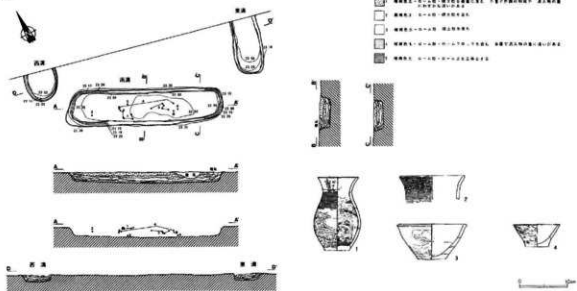
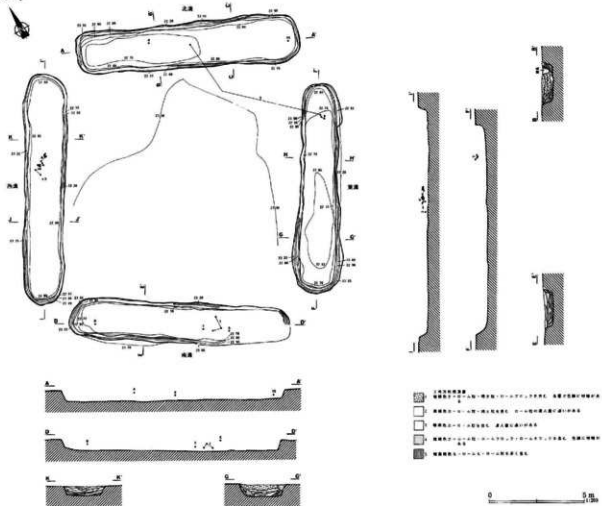
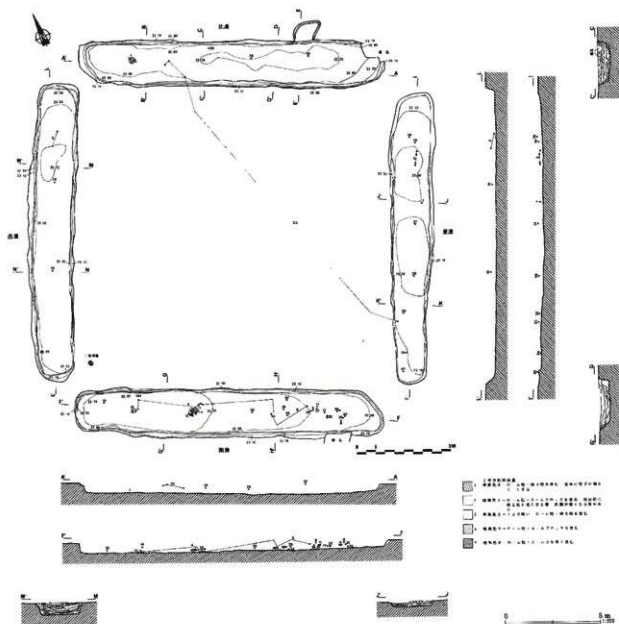


図3号



第8図 終遺跡1・3号周溝墓と出土土器 (報告書より転載)



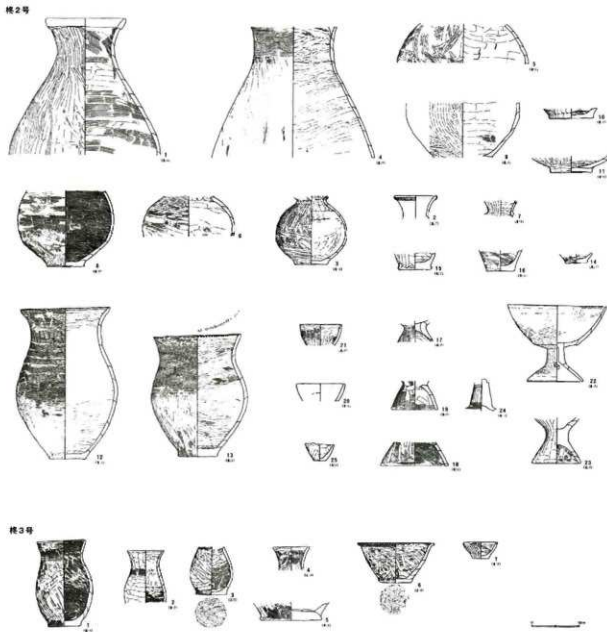
第9図 柁遺跡2号周溝墓(報告書より転載)

かに深くなっている。覆土は基本的に自然堆積と考えられる。下層にローム粒子やブロックを多く含むが、3号同様に周溝の内周、外周にともに認められ、壁の崩落土である可能性が高い。1層には焼土粒子が含まれている。

遺物は完形の甕1点と壺2点、高坏1点が出土している。1の甕は東溝中層の2・3層の層理面から横転した状態で出土し、その上を1層が被覆してい

る。南溝の2層中からは壺が出土している。これらの土器は周溝埋設途中に入れられた(納められた)ものと考えられる。高坏は攪乱からの出土である。このように、西・南側が土器を入れる、見られる「正面」と考えられる。

4号壺棺も同様の埋没状況で、南溝の2層を切り込んで壺棺が設置され、その上を1層が被覆している。こうした状況から4号壺棺墓は4号周溝墓の迫



第10図 終遺跡2・3号周溝墓出土土器 (報告書より転載)

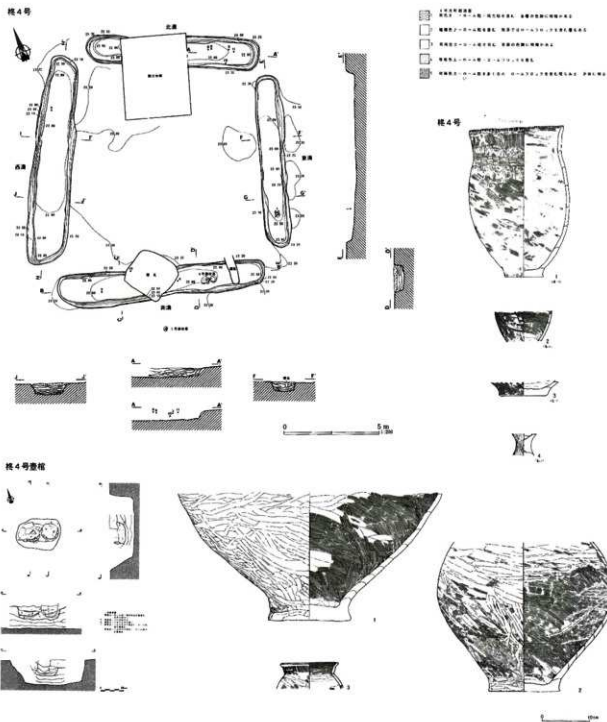
葬である可能性が高い。

出土土器 非常に丁寧に作られており、型式論的な前後関係を感じさせないものである。しかし、土器製作において相互に共通性が見られるような個体はみられない。後期前半の岩鼻式においても、現段階では複数個の土器を方形周溝墓専用に製作するという土器使用は認められないと考えられる。

次に問題になるのは、各周溝墓の道具立てである。

各周溝墓の出土量は、1号3(破片7)、2号7(17)、3号7(10)、4号1(11)+4号壺棺2である。器種は甕・鉢類だが、2号のみは鉢の替わりに1・4の大型の壺が加わる。2号の12・13と4号の1の壺は器高が30cm前後の比較的大型のものである。

このように、量的な差異はそれほど明瞭でないが、器種では2号の大型壺+大型甕、4号の大型甕、1・3号の甕+鉢といった違いが見られる。こうした違

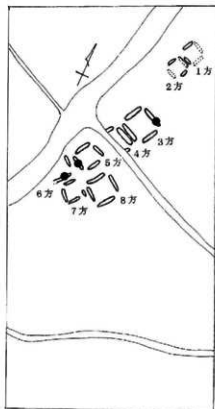


第11図 終遺跡4号周溝墓、4号壺棺墓と出土土器（報告書より転載）

いは、必ずしも遺構の規模の大小に対応していないが、中期には見られず、比企地域ではこうした道具立ての違いは後期から始まると考えられる。

1号1・2、4号壺棺1は2次加熱を受けている。2号では縄文時代、古墳時代前期の遺物が出土して

いるが、弥生時代後期の本周溝墓に伴うと考えられるものは1・4・12・13・23である。製作の同時性を示すようなものは見られないが、1・2の壺は器高40cmを越える相当大型のもので、集落出土のものに比しても大きいことから、周溝墓のために用意さ



第12図 花影遺跡（吉ヶ谷式）
 （柿沼2007を改図・転載）

れた可能性が考えられる。

土器配置 一方、各周溝墓の様相を見ると、群としての造営の様相が明らかになってくる。もう一度各周溝墓の土器配置について確認しておく、1号が南側、2号が南側と大型壺の内1点のみが北溝、3号が南側と西側、4号が南側と東側に土器配置が行われている。築造順序は、土器配置が正面観を意識しているという前提に立つと、土器配置をされた側を塞ぐように造られている周溝墓の方が後から造られたことになるため、1→2→3、2→4という順番が考えられる。出土層位は2号が概して底面付近から出土するのに対して、その他は中層からの出土である。出土土器は型式的前後関係を感じさせるほどの幅は感じさせないが、共通する土器を配置しているという状況ではなく、土器から配置の同時性を

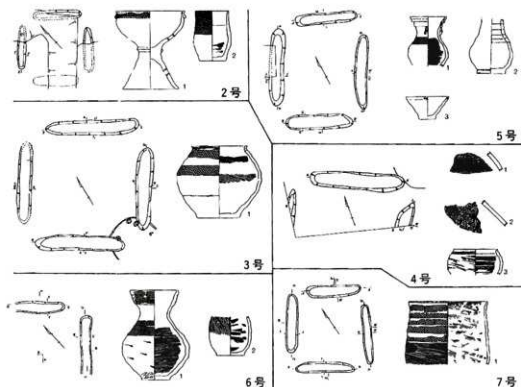
窺うことはできない。各周溝墓出土の土器は第2層から出土する 경우가多く、共通した1層によって被覆されている。従って、周溝に入れた時点の様相は明らかでないが、2層堆積中、1層被覆前の時間帯で同時に見えていたことになる。北側は調査区域外のため不明だが、3号南側、西側、4号南側、東側は、群全体の三方にもなっており、個々の周溝墓の土器配置が群全体に対する土器配置にもなっていると考えられる。

(3) 花影遺跡 弥生時代後期後半（吉ヶ谷式）

比企地域の弥生時代後期後半の土器型式である吉ヶ谷式の周溝墓群で、群の様相が明らかなものは滑川町新井遺跡（木村1986）と坂戸市花影遺跡（谷井1974）で知られるのみである。このうち報告されているのは後者のみである。

花影遺跡（第12・13図）からは8基の方形周溝墓が検出されている。平面形はいずれも四隅切れである。各周溝墓については「土器1」で述べたため、ここでは出土土器と出土状況について見ていきたい。

土器 出土土器の器種は、1号が高環の破片1点、2号が高環と小型壺各1点、3号が完形の無頸壺1点、4号が壺2点、無頸壺の破片1点、5号が小型壺1点と鉢1点、6号が壺・壺各1点、7号が壺の破片1点である。8号からは遺物が出土していない。これらの土器は型式差を認め難いもので、ごく短期間に周溝墓群の造営が行われたことを示している。花影遺跡の場合、超大型壺等が認められず、また周溝墓ごとに出土器種も異なり、共通性を意識したような土器製作は見られない。あえて言えば、壺や高環は粘土が精選され、焼成が良好だが集落出土土器に比して特別というわけではなく、周溝墓専用を用意されたものとはいえない。3号の無頸壺は鋼



第13区 花影遺跡の遺構分布と土器 (報告書から改図・転載)

文の施文や調整も丁寧な秀麗なもので、その可能性を感じさせる。

また周溝墓の規模と遺物の多寡は一致していないことにも注意が必要であろう。終遺跡で見られたような周溝墓間の道具立ての違いは、破片が多く確実ではないが、1・2号が高環中心、3～6号は壺が中心といえるであろうか。

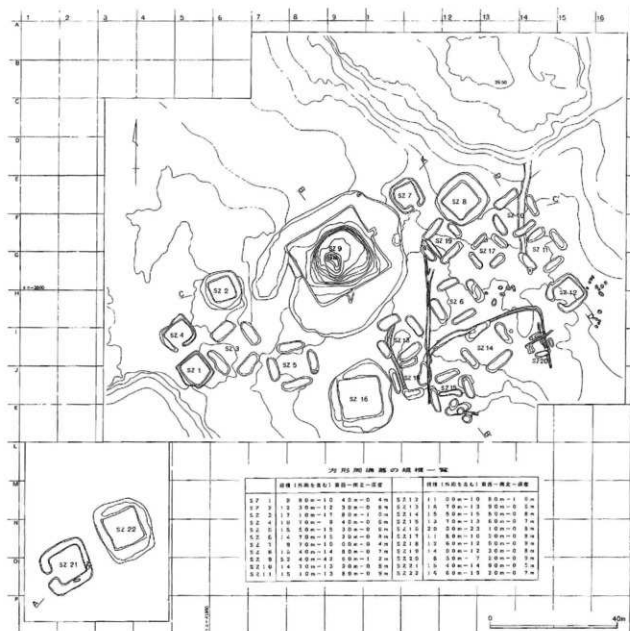
土器配置 具体的に土器の出土位置が明らかなのは、2・3・5・6号である。土器の出土状況については既に「土器1」で見ているが、再度土器配置という視点からみておこう。

方形周溝墓は遺構の分布状況から、1・2、3～5、6・7、8のおおよそ4群に分けられる。遺構の遺存状況が悪いことから出土遺物は少なく、現状が直ちに当時の「配置」を示していない可能性もある。

1・2号は小型の一群である。2号で南東溝から壺1、高環1が周溝底からかなり浮いて出土している。築造順序を示すような土器配置は窺えない。

3～5号はやや規模の大きい一群で、4号の南側は削平されているが北東-南西方向に接続して築造されている。3号で北溝の東端、確認面直下から無頸壺が倒立した状態で出土している。5号で南溝から小型壺2点と鉢1点が、南溝のやや西側の中層から出土している。築造順序を示すような土器配置は窺えない。3号北溝の無頸壺と5号南溝の土器配置は、この群全体に対する配置にもなっている。

6・7号は3～5号の南側に、接続して北西-南東方向に築造されている。6号は壺が東溝のやや北寄りから横転した状態で、中層から出土している。7号からは壺が出土しているが状況は不明である。7号が6号の東溝の土器配置を塞ぐ位置にあることか



第14図 広面遺跡全測図（報告書より転載）

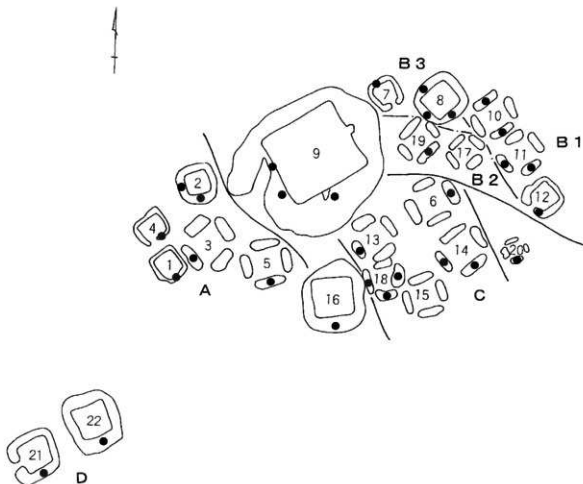
ら、6→7の順序が考えられる。

3～5号、6・7号、8号は前二者が隅を意識して連接して造られていること、8号は両者を埋めるように造られていることから、8号が最後に築造されたものと考えられる。

また、各々の群は東溝を中心に土器配置が行われていることから、方形周溝墓群全体が東側を意識しているのが分かる。前述の代正寺の例は竪穴建物群

のある方向を意識しており、花影遺跡では竪穴建物跡は不明だが、東側を見られる方向として意識しているものと考えられる。

以上、出土土器は少ないものの、各々の出土状況を土器配置として記述することができた。東側を中心とする正面観があり、不明瞭ではあるが群全体に対する土器配置が行われていたと考えられる。



第15図 広面遺跡の遺構分布と土器配置

(4) 広面遺跡 古墳時代前期(五領式)

広面遺跡(第14~21図)は越辺川右岸に当たる毛呂台地東端の低台地に立地している。古墳時代前期の方形周溝墓22基が検出されている。広面遺跡は以前に述べたように、中耕遺跡と一体の墓域を構成するものであるが、ここでは一つのまとまりとして検討することにした。なお、平面形や周溝の法量については表化して示した(表1)。出土遺物は土器のみであることから、特に断りのない場合には出土状況は出土土器についての記述を指している。

広面遺跡の方形周溝墓群は、平面的な遺構の分布状況から、A・B・C・D・SZ9・16・20の7つのブロック(註1)に分けられる。B群は更に1~3

に分けられることから、以下では、9つのブロックとして論を進めることにしたい。

SZ9では南西溝の陸橋部周辺と南隅の溝底から一括して出土している。南東溝の超大型壺21は、中層の10・12層からの出土である(第16図)。

Aブロック(第17図)はSZ1~5の5基である。SZ9の西側に展開し、四隅切れ(2基)と一隅切れ(1基)、全周(2基)のものが混在する一群である。出土層位については、SZ1が方台部からの流れ込みである4・8層中からの出土である。SZ2はレンズ状堆積を示す2層中から溝底から10cmほど浮いて出土しており、一括性が高いとされている。SZ3は溝底から浮いた2層中からの出土で一括性が高いと

第1表 広面遺跡の周溝墓

No	平面形	陸橋部	方台部	規模(m)		周溝幅(m)		深さ(m)		穿孔壺 ()内は点数	施設	備考
				長軸	短軸	最狭	最広	最浅	最深			
1	隅丸方形	全周	長方形	8.3	7.2	1.0	1.8	0.2	0.4			
2	隅丸方形	全周	正方形	8.2	7.8	2.4	2.6	0.3	0.6	42.8(3)	テラス	
3	方形	全周	正方形	10.2	10.1	3.2	4.3	0.4	1.0	100(1)		
4	隅丸方形	四隅切	長方形	8.2	6.7	0.6	1.6	0.2	0.5			
5	方形	四隅切	正方形	11.0	9.9	2.4	3.1	0.4	0.5	16.6(1)	入口段 中央段	
6	長方形	四隅切	正方形	10.7	9.9	2.2	3.5	0.1	0.8			
7	隅丸方形	1-中央	正方形	7.0	7.0	1.0	1.6	0.1	0.4			
8	隅丸方形	全周	正方形	10.1	9.1	1.6	3.0	0.2	0.7	50(4)		
9	不整円	1-中央	正方形	25.6	23.2	8.0	13.0	0.1	0.2	21.4(3)	壺出2箇所	盛土
10	方形	四隅切	正方形	10.4	9.3	2.0	2.5	0.3	0.9	16.6(2)		
11	長方形	四隅切	正方形	10.1	9.3	2.5	3.0	0.3	0.9	50.0(1)		
12	隅丸方形	1-中央	正方形	8.2	8.0	1.1	2.1	0.5	1.0			
13	長方形	四隅切	正方形	9.6	8.8	2.4	3.8	0.3	0.6			
14	不整長方形	四隅切	正方形	11.7	9.6	2.1	3.4	0.5	0.8	14.2(2)		
15	不整長方形	四隅切	不正方形	9.4	9.3	2.2	2.8	0.3	0.6			
16	不整方形	全周	正方形	13.6	13.1	1.9	5.3	0.2	1.0			
17	長方形	四隅切	長方形	8.2	7.0	1.6	2.3	0.3	0.8	11.1(1)		
18	不整方形	四隅切	不正方形	8.6	8.2	2.0	3.0	0.4	1.0			
19	長方形	四隅切	長方形	9.3	7.5	2.4	2.6	0.4	0.8			
20	不整方形	四隅切	長方形	6.2	5.4	1.0	2.2	0.6	1.0			
21	隅丸方形	1-中央	正方形	10.7	9.9	1.7	4.0	0.3	0.5	37.5(3)	ビット	
22	不整方形	全周	正方形	11.4	11.2	2.4	4.8	0.5	0.6	40.0(2)		

されている。南東溝のものは破片で、溝底から出土している。SZ4は小破片のみの出土で、本遺構に帰属するものであるのか不明である。SZ5は上・中層に当たる2・8層中からの出土である。溝底から出土の西溝の一群についてもほぼ一時期のものと考えられている。

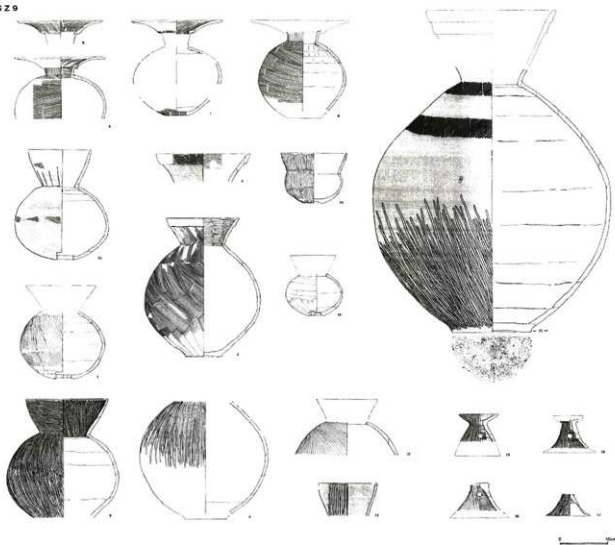
BブロックはSZ7・8、10~12、17・19の7基である。SZ9の東側に展開し、四隅切れ(4基)と1辺の中央に陸橋部があるもの(2基)、全周(1基)のものが混在する一群である。平面的な分布状況から、B1(10~12)、B2(17・19)、B3(7・8)に分けられる。

B1ブロック(第18図)の出土層位については、SZ10で中~上層に当たる9・10・13層から出土し、特に南西溝出土のものは土圧で潰れた状態を呈し、一括して周溝に入れられた可能性が高い。SZ11では南西

溝の溝底から大型壺が破砕された状態で出土している。南東溝は中層に当たる8層からの出土である。SZ12の南西溝のものは溝底から土圧で潰れた状態で出土し、一括して周溝に入れられた可能性が高い。北東溝のものは中層の2層中からの出土である。

B2ブロック(第19図)の出土層位は、SZ17の北西、北東、南東溝で1次堆積土の最下層・下層から出土している。北西溝は14・15層、北東溝は7・8層、南東溝は11層からの出土である。いずれも土圧で潰れた状態で、一括して納められたものであろうか。SZ19では北東溝で下層に当たる7・8層中から、南東溝で中~上層から土圧で潰れた状態で出土し、一括して周溝に入れられた可能性が高い。

B3ブロック(第19図)の出土層位は、SZ8で北超大型壺が西溝の溝底から、南西溝・南東溝のものは1次堆積土である2・3層中からの出土である。



第16図 広面SZ9出土土器（報告書より転載）

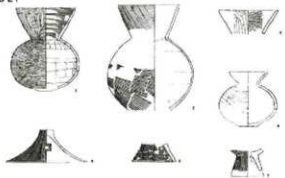
一括して周溝にもたらされた可能性が高い。報告書では2箇所の集中する出土状況から、2回の土器使用を想定しているが、集中の箇所と回数との関係は不明瞭で、確実とは言い難い。それ以外のものは中層の13・15層からの出土である。SZ7は下層の8層からの出土である。

Cブロック（第20図）はSZ6、13～15、18の5基である。SZ9の南側に展開し、いずれも四隅切れの平面形である。西側に大型で全周するSZ16が軸方向を違えて接しており、あるいは本群に入れるべきものであるのかもしれない。東側にやや距離を置き

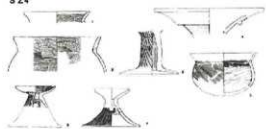
てごく小型のSZ20がある。

層位は、SZ6で第一次堆積土の上位の下層（8層）から出土している。SZ14は第一次堆積土の上位の下層（2・8・9・14・17層）から底面より浮いて出土している。SZ13の北東溝は溝底、南西溝の大型壺と器台は溝底から土圧で潰れた状態で出土し、一括して周溝に入れられた可能性が高い。それ以外のものは下層の2層中から、溝底からかなり浮いた状態で出土している。SZ18は東・西溝で溝底から、南溝で溝底からかなり浮いた状態で出土している。SZ15の層位は不明である。SZ16は小型壺が溝底から、SZ

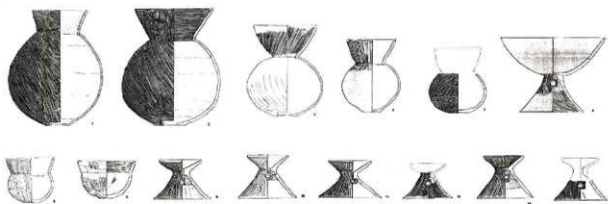
S21



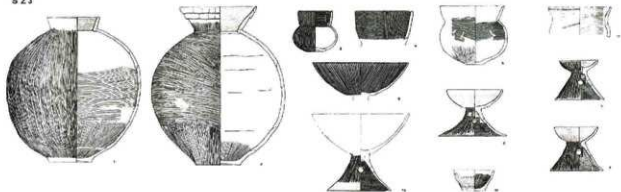
S24



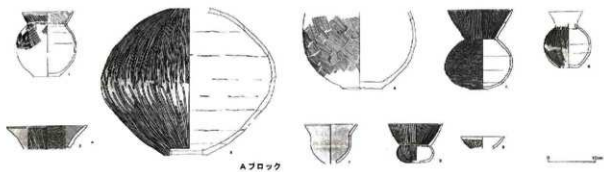
S22



S23



S25



Aブロック

第17図 Aブロック出土土器（報告書より転載）

20は壺が中層から、鉢が溝底から出土している。

Dブロック(第21図)はSZ21、22の2基である。SZ.9を中心とする墓群とは南西側に離れており、平面形態も全周形と中央隆橋型のもののみで構成されており、新しい段階に造られたものと考えられる。層位は、SZ21のものが溝底から、SZ22の西溝のものと南溝の大型壺が溝底から、小型器種がやや浮いた状態で出土している。

土器 出土土器は、いずれも口縁部が「く」の字状を呈し、器面が均一に仕上げられており、関東地方の古墳時代前期の型式である「五領式」の特徴を良く示している。既に何度か大宮台地、荒川低地、見玉地域、妻沼低地の古墳時代前期の土器群については述べているが、広面遺跡が所在する比企地域の資料については論じたことがなかった。比企地域は、こうした県内の他の地域とは在来の吉ヶ谷式との関係から、型式論的变化の方向性がやや異なるようである。そのため、本来ならば地域全体について論じべきなのだろうが、本稿のねらいとは異なるため別に譲り、ここでは遺跡内の土器群の型式論的变化について概観するととどめたい。

広面遺跡出土の土器群は、大型壺、中型壺、器台を軸とした型式論的变化から、大よそ四段階に分けられる。

第1段階はSZ9・13である。超大型壺(註2)、大型壺は口縁部が短く、胴部は長めである。吉ヶ谷式の流れを汲むもので肩部に二段の粗い単筋LRの縄文が施される。13-1は口縁部に輪積み痕を残すものである。中型壺には2種類あり、二重口縁の焼成前穿孔壺と直口縁のものがある。前者はSZ9のみに見られるもので、本遺跡では一般的なものではない。後者の口縁部は短めで、胴部に対して径が小さく、算盤玉に近いような潰れた球形胴である。器台は全体的に径に対して高さがあり、器受部が小さい。器

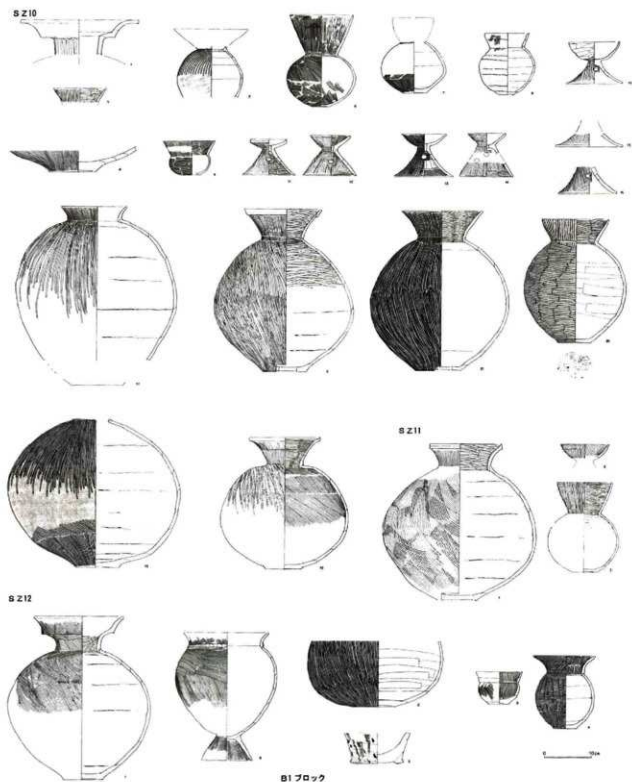
受部は厚めでしっかりしたものである。脚部は直線的で器受部に対して径がやや大きくなる。

第2段階はSZ.3・6・7・8・10・18である。超大型壺、大型壺は第1段階よりは長めになるがやはり口縁部が短く、胴部は長めである。文様は施されなくなる。3-1、10-17、8-1は大型で長めの胴部に、ごく短い口縁部が付く特徴的なものである。SZ10には球形胴のものが加わる。中型壺は直口縁のもののみである。口縁部は第1段階に比して大きめになり、量的には少ないが口縁部と胴部の径がほぼ等しくなるものがある。器台は径に対する高さの割合が減じて、器受部が大きくなる印象があるが、脚部に対する器受部の径はまだ小さめである。

第3段階はSZ.2・5・14・19・20である。超大型壺は見られない。大型壺は吉ヶ谷式の胴部が長めなのは認められず、球形胴のもののみによって占められる。中型壺は口縁部が大ききもので、口縁部と胴部の径・高さがほぼ等しくなる。器台は器受部が大ききもので、器受部と脚部の径がほぼ同じである。接合部が太めの印象を受ける。

第4段階はSZ.1・4・11・12・17・21・22である。器種に台付壺と柱状脚の高杯が加わる。大型壺は球形胴のもので、二重口縁のものと複合口縁のものがある。中型壺は径に対して高さがあるもので、球形胴にやや長い口縁部が付くものである。頸部のしまりが弱い。器台は高さがあるもので、器受部が薄く扁平になる。接合部が柱状を呈し、脚台部は高く、大きく裾が広がるものである。SZ.4の高杯は柱状を呈するもので、本遺跡で最も新しい様相を示している。SZ.12・17の台付壺は、いずれも素口縁で胴部が長胴気味、脚台部は小さめである。SZ.21のS字壺は口縁部の作りが粗雑で、胴部も球形を呈し、器肉も全体に厚めで模倣が崩れている。

次にこれらの土器の共通性についてみていき

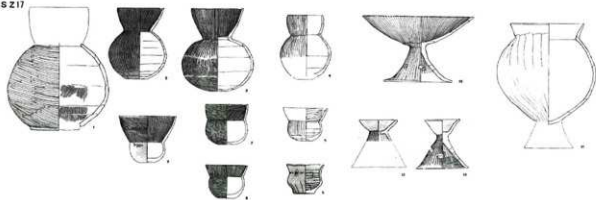


第18図 B1ブロック出土土器（報告書より転載）

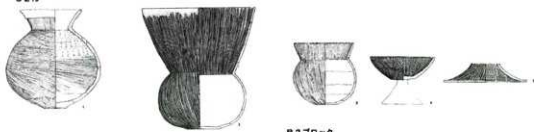
い。まず、同一周溝墓の土器相互の関係である。SZ2は1・2が、プロポーションは異なるが、器高がほぼ等しく、胴部の成形単位、口縁部の接合方法、

胴部外面のへら磨きが同様である。対の土器の可能性も考えられる。SZ3は1・2が、口縁部や調整は異なるが、胴部の法量がほぼ等しく、相互に意識し

S217

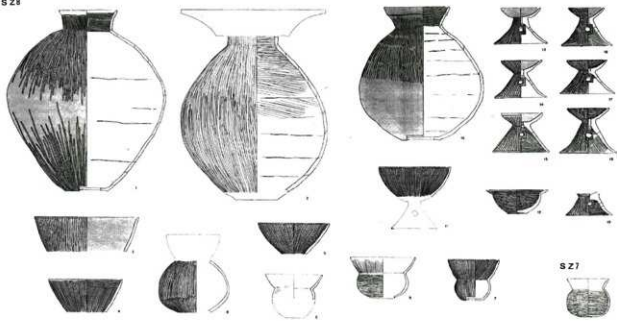


S219



B2ブロック

S28

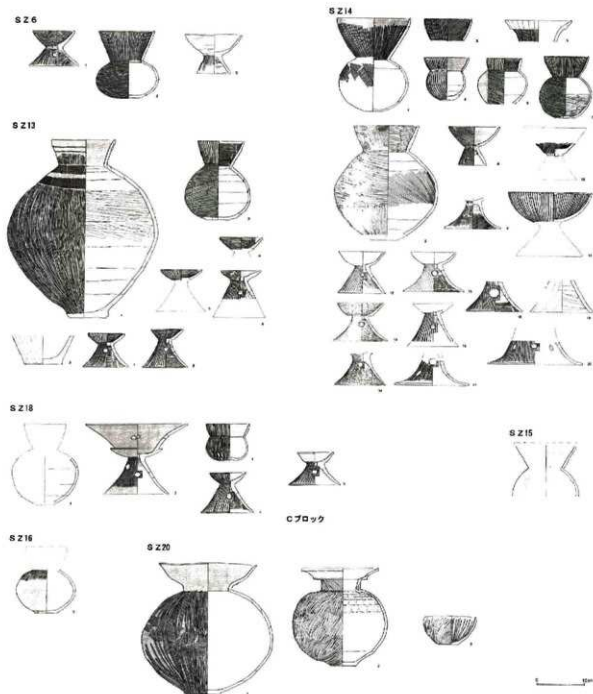


B3ブロック

S27



第19図 B2・3ブロック出土土器（報告書より転載）



第20図 Cブロック・SZ16・20出土土器（報告書より転載）

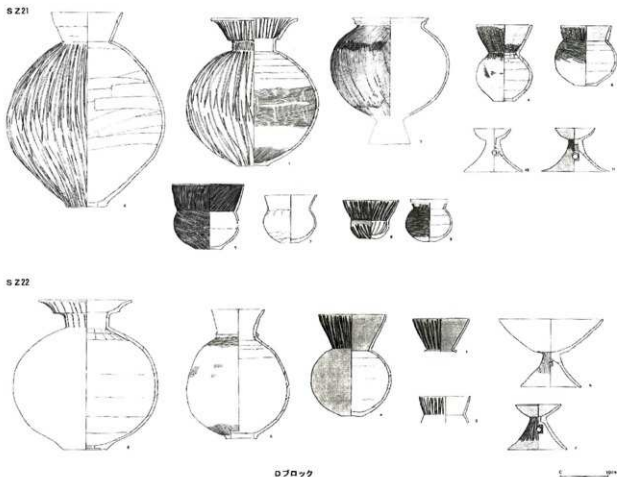
ている可能性が考えられる。SZ8も同様の意識が働いているのだろうか。SZ9は中型の二重口縁の焼成前穿孔壺が、ほぼ同一の器形、法量、調整で一括での製作が考えられる。

また同一周溝墓出土の器台、鉢等の小型器種は、法量、形態ともに近似し、同一時点での製作の可能

性がある。

異なる周溝墓の間では、前述のように3-1、10-17、8-1が大型の長胴に短い口縁部が付く特徴的なものである。同時、あるいは相互に意識して製作されたものと考えられる。

出土量 出土量が多いのは、SZ2（17点）、8（19点）、



第21図 Dブロック出土土器 (報告書より転載)

9 (19点)、10 (21点)、14 (20点) である。これらは、SZ9と規模10m前後のもの3基、8m前後のもの1基である。10点以上のものは、SZ3 (12点)、17 (13点)、21 (11点) で、規模10m前後のもの2基、8m前後のもの1基である。5点以上のものはSZ4 (7点)、5 (9点)、12 (6点)、13 (8点)、18 (5点)、19 (5点) である。いずれも規模8~11m前後のものである。それ以外は5点以下で、10m前後のもの3基、6m前後のもの2基である。以上のように、いずれにおいても方台部規模10m前後のものが中心である。これは規模の分布がその辺りに集中することから当然の結果とも考えられるが、逆に遺物量の多寡は遺構の規模に必ずしも対応しないことを示し

ているとも言えよう。

底部穿孔 所謂底部穿孔壺はSZ2・3・5・8・9・10・11・14・17・21・22の10基から出土している。焼成前穿孔のものはSZ9の中壺3点のみで、それ以外は焼成後穿孔である。SZ9以外はいずれも規模10~11mのもので、SZ11・22以外は出土量が多い周溝基からの出土である。量同様に規模とは対応しないが、出土量との間には相関が認められる可能性がある。また同一器種内での穿孔率は、前述の順に42.8、100、16.6、50、21.4、16.6、50、14.2、11.1、37.5、40%である。SZ3は1点のみしか出土していない鉢に穿孔されている。約半数に穿孔が施されるもの(2・3・8・11・22)と、1割から2割の

第2表 SZ9・Aブロックの出土位置と器種 (()は遺存率の低いもの)

SZ9

遺構名	北西(北)	北東(東)	南東(南)	南西(西)	備考
SZ9 (21)	高環1	(大型壺1)	超大型壺1 大型壺1(11) 中型壺1(11) (小型壺1) (高環2) (器台2)	中型壺2(2) 陸橋部 小型壺1 中型壺1 小型壺1	陸橋部 角コーナー
			突出部		

Aブロック

遺構名	北西(北)	北東(東)	南東(南)	南西(西)	備考
SZ1 (7)		(小型壺) 北 (中型壺・高環) 東	中型壺 南 (小型壺1・器台2) コーナ		
SZ2 (17)			小型壺1・器台1 器台1 (器台1) (小型壺1)	中型壺3 器台3 高環1 小型壺2 器台2	中央 コーナー
SZ3 (12)			(壺2)	雨より 大型壺2 小型壺2(1) 高環1(2) 器台2 鉢1	中央
SZ4 (7)		(高環1)	北隅 (壺1・壺1・器台2)	陸橋部 (壺1)	
SZ9 (7)			大型壺1・中型壺3 小型壺1・(器台1)	南隅から中央 (壺2・小型壺1)	中央

ものに二分されるようである。また、CブロックはSZ14の1基のみで、しかも1点のみにしか施されていない。A・B・Dブロックの約半数のものに施されているのとは対照的である。

土器配置 次にこれらの土器の配置状況についてみていきたい。まず、方形周溝墓群全体としては、既に村田健二により報告書のまとめの中で以下の3点にまとめられている(註3)。

①セット関係の高いものは南溝中央から集中して出土する。②床面直上からの出土はまれで、方台部の崩壊がある程度進んだ後で方台部側から流出した状態で出土する。③周溝の完全な埋没は越辺川の氾濫等により一気に行われたもので、各周溝からの出土状況は当初の状況を反映している。

これらの把握は、全体としての傾向を的確に捉えており、傾聴に値するであろう。特に南側が土器配置の中心であるとする指摘は重要である。一方、こうした状況を一括して捉えてしまったために、各ブ

ロック内部の土器使用状況には踏み込んでいないとも言えよう。以下、各ブロック内部の状況を検討し、そこから群構成について述べたい。

SZ9(表2)では南東溝と南西溝に土器配置が行われている。南東溝では方台部の突出部を中心に、南西溝では陸橋部を中心に出土している。

AブロックではSZ1で北東、南東溝、SZ2で南東、南西溝、SZ3で南西溝、SZ5で南東溝に土器配置が行われている(表2)。村田はSZ3・5の破片出土を積極的に破砕として評価するが、遺存率が低く、筆者には判断しがたいので除外した。再三述べているようにこうした土器配置が正面観を示すものとするならば、まずSZ3・5で群の南側、西側に対して配置がなされている。また、SZ3はSZ9の陸橋部の延長線上の南側に位置し、SZ9の入り口を意識しているものと考えられる。SZ2はその入り口を更に塞ぐ位置にあり、南西溝を中心に土器配置が行われることから、SZ9西側の土器配置の正面を更新し

第3表 Bブロックの出土位置と器種 (()は遺存率の低いもの)

B1ブロック

遺構名	北西(北)		北東(東)		南東(南)		南西(西)		備考
SZ10 (21)	中型壺1		小型壺1	北隅	超大型壺3	東半			
	小型壺1		(小型壺1)	中央	大型壺2				
					(小型壺 欠ける)				
					竈台4				
					高坏1	南隅			
					(竈台2)				
					超大型壺1				
					(竈底1)				
SZ11 (3)	(竈台1)				中型壺1	中央	大型壺1	中央	
SZ12 (6)			中型壺1	中央	(壺1)		台付甕1	跡構 東側	
							小型壺1		
							(大型壺1)		

B2ブロック

遺構名	北西(北)		北東(東)		南東(南)		南西(西)		備考
SZ17 (13)	大型壺1	中央	中型壺1	中央	小型壺1	中央	小型壺1	中央	
	小型壺3		小型壺1		小型壺1	南隅			
	(竈台1)		高坏1		高坏1				
			台付甕1						
SZ19 (5)			中型壺1		大(中)型壺1	東隅			
					小(中)型壺1	南隅			
					(高坏2)				

B3ブロック

遺構名	北西(北)		北東(東)		南東(南)		南西(西)		備考	
SZ8 (19)	超大型壺1	西隅	(高坏2)		小型壺1	中央	超大型壺1	南隅		
	竈台4				竈台1					大型壺1
	(大型壺1)	中央			鉢1					(中型壺2)
	(小型壺1)									(小型壺2)
						(竈台1)				
SZ7 (1)	小型壺1	中央								

ている。SZ4・1はそれを塞ぐ位置にあり、SZ1は南西側に土器配置が行われることからSZ3の正面観を更新しているものと考えられる。

また、SZ1の北西溝はSZ3の北西溝の延長線上になる。SZ4は陸橋部が南隅になり、それを塞ぐ形でSZ1が造られている。また、SZ4によってSZ9の入り口は全く見通せないことになる。

以上の土器配置の様相から、Aブロック全体がSZ9の後に造られ、SZ3→5、SZ3→1、SZ4→1の順序が考えられる。SZ2とSZ3・5の前後は不明だが平面形や出土遺物から、前者が後者より後出するものと考えられる。このブロックの最終的な姿として、SZ1・2・5の土器配置が群の正面観を形成していたものと考えられる。

Bブロック(表3)ではB1のSZ10で北西、南東溝、SZ11で南東、南西溝、SZ12で南西溝に土器配置が行われている。B1は列状の配置になっており、SZ10の南東溝の土器配置を塞いでSZ11が造られ、更にSZ11の南東溝の土器配置を塞ぐ位置にSZ12が造られる。またSZ10の北西溝はSZ9の南西溝に軸方向が合わせられており、それを意識して築造されたと考えられる。SZ10・11は四隅切れの平面形で、南北方向への配置が意識されているものと思われる。SZ12はこの2基とはある程度の時間幅があるのかもしれない。

B2のSZ17はいずれの周溝にも土器配置が見られるが、北東・北西溝が中心である。SZ19は南東方向に土器配置が行われている。両者は隅を合わせる

第4表 Cブロックの出土位置と器種 (()は遺存率の低いもの)

遺構名	北西(北)	北東(東)	南東(南)	南西(西)	備考
SZ6(3)		高坏1 磨台1 小型壺1	東隅寄 中央		
SZ14(20)			中型壺1 (小型壺1) (中型壺1) (磨台1)	南隅 中型壺1 (小型壺2) (高坏4) (磨台2) (小型壺1) (高坏2) (磨台1) (大型磨台1)	中央 南隅 中央
SZ13(8)		磨台1	(磨台2)	大型壺1 小型壺1 磨台1 (壺1) (磨台1)	中央 南隅 中央
SZ18(5)		磨台1 大型磨台1→酒甕と磨台	磨台1 (小型壺1)	大型磨台1→東縁と磨台 小型壺1	
SZ15(1)			(中型壺1)	類→ア-初	

第5表 Dブロック・SZ20の出土位置と器種 (()は遺存率の低いもの)

遺構名	北西(北)	北東(東)	南東(南)	南西(西)	備考
SZ20(3)			大型壺1 中型壺1 鉢1	中央 南東隅	
SZ21(11)			超大型壺2 中型壺2 小型壺4 磨台2	中央～ 南隅	台付磨1 中埋埋溝
SZ22(7)			超大型壺3-2 高坏1 磨台1 (小型壺1)	中央 (小型壺1)	南西隅

形で築造されており、いずれもの土器配置を塞ぐ形にはなっていない。その一方でSZ17はSZ11とも隅を合わせていることから、17が先行し、更に19が造られるものと考えられる。

B3のSZ8は、北西溝、南東溝、南西溝に土器配置が行われている。南東溝と南隅のものは遺構の南側を意識しているものと思われ、特に南隅がSZ19の北隅を避けて造られていることからB2を意識したものとも考えられる。SZ7は北西溝に小型壺1点が入られるのみで、SZ8との前後も不明である。7の陳橋部をSZ8が塞ぐ形になることから、あるいは8が後になる可能性も否定できない。8の北西溝と7の南東溝は軸方向が同一線上になり、お互いを意

識しているものと考えられる。この線上にSZ9北東溝の突出部があり、それを意識した遺構の配置なのであろうか。

以上の土器配置の様相から、やはりBブロックもSZ9を強く意識しているものと思われ、Bブロック全体がSZ9の後に造られると考えられる。B1はSZ10→11→12、B2はSZ17→19、B3の順序は不明である。このブロックの最終的な姿として、SZ7・8、10～12の土器配置が、群というよりも広面の墓群全体の北側と東側になっている。しかし、東側には土器配置がなされておらず、中耕遺跡の墓群に面する方向であるため、見られる方向として意識されていない可能性もある。またSZ11・12は西側に土

器配置、陸橋部が認められるが、これはCブロックとの間の空隙地—「墓道」に向いているものとも考えられる。

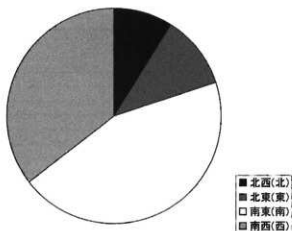
Cブロック(表4)ではSZ6で北東溝、SZ14で南東、南西溝、SZ13で南西溝、SZ18で東、西、南溝に土器配置が行われている。まずSZ6・14で群の南側、東側、西側に対して配置がなされている。SZ15は14の西側の土器配置を塞ぐことから、後から造られたと考えられる。SZ18はSZ15を南東隅が避けるように歪んだ形態を示しており、13の南溝に北溝が連結していることから、両者よりも後になると考えられる。SZ16はSZ18の西溝の土器配置を塞ぐ位置にあり、後から造られたものと考えられる。

また、SZ13・18の西溝はSZ9の南東溝の突出の延長線上にあり、意識している可能性が考えられる。SZ16はSZ9を完全に見通せないようにする位置に造られているようである。B1のSZ11の北西溝は、SZ13・6の北西溝の延長線上になり、両者の群造営への共通した意識が窺える。

以上の土器配置の様相から、Cブロック全体がSZ9の後に造られると考えられる。まずSZ13・6・14が先行し、次いで15、最後に18が造られる。更にそれに加えて16が造られるのであろう。従って、このブロックの最終的な土器配置は6・14・13・18によって外側に向かってなされている。それを塞ぐ形でBブロックや16・20が造られるものと考えられる。

DブロックではSZ21・22で南溝に土器配置が行われ、こちらを見られる側として意識しているのが分かる。両者の土器配置による前後は不明だが、SZ22は21の東溝を意識して西溝が細くなっており、後から造られたと考えられる。

広面遺跡の方形周溝墓群は、以上の様相から、まずSZ9が先行して造られ、各ブロックの造営の基本



第22図 広面遺跡における周溝別出土割合

ラインを提供している。次いでCブロックの6・14・13が造られ、これを意識しながらBブロックが造られる。AブロックはSZ9の陸橋部を塞ぐ一群で、群全体の様相からBブロックに並行して造られている可能性が高い。Dブロックや16は最終段階の築造と考えられる。

(5) 比企地域における土器配置と群構成

以上、比企地域の代表的な方形周溝墓群について、土器配置と群構成を検討してきた。ここではこうした視点からみた比企地域の方形周溝墓のあり方についてまとめておきたい。

土器 まず、土器製作そのものについては、大宮台地の井沼方遺跡に見られたような周溝墓専用に作られたと考えられるものは、広面遺跡の超大型壺まで認められず、埋葬に対する労力の払い方、あるいは考え方がこの前後で異なることが分かる。

一方、大型の壺等を用いるような道具立ての格差は、代正寺遺跡の3号3や10号10、椋遺跡の2号12・13、4号1、広面遺跡などで認められる。吉ヶ谷式の例としてあげた花影遺跡は特に大型の土器を含まないが、同じ吉ヶ谷式で鉄剣、銅劍の副葬が行われた東松山市観音寺遺跡などでは、器高30cmを超える大

型の壺・甕が使用されている(宮島1995)。花影遺跡にはこうした特異なものが見られないだけで、吉ヶ谷式全体の中では格差が認められると考えるべきなのだろう。

同様に同一遺跡における周溝墓間の道具立てでは、代正寺遺跡がどの周溝墓でも壺が中心であるのに対して、柵遺跡、花影遺跡では周溝墓ごとに違いが見られるようになる。

出土器種は、前述のように中期の代正寺遺跡は壺類が75%、甕類が15%で、壺類が中心である。これに対して後期の柵遺跡では遺存率の高いもので、壺類46%、甕・鉢類が23%、花影遺跡では壺類50%、甕・鉢類が25%、前掲の観音寺遺跡では壺類28%、甕・鉢類が71%で、後期段階では壺類に加えて甕が主要な器種であることが分かる。吉ヶ谷式と同時期の井沼方遺跡では壺類が82%で、地域差を現しているものと考えられる。

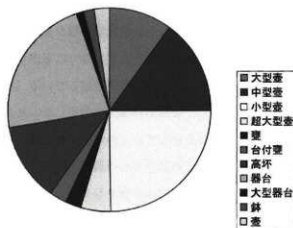
広面遺跡では、壺類57%、甕・鉢類6.8%、高坏12.6%、器台23.6%で、再び壺類が中心になり、更に高坏・器台が加わることが分かる。

出土量は大型のものに多い傾向が見られるが対応関係はあまり判然としない。

底部穿孔等の土器の変形行為については、土器Ⅰで述べたところである。中期では底部中央に焼成前の小孔が穿たれるものやに縁部を打ち欠くものがある。後期段階では希薄で、古墳時代前期になってから極端に個体数が増える。出土遺構は規模の大小に左右されないことから、大小とは別の規範があるものと思われる。

広面SZ9は、焼成前穿孔壺が唯一出土しており、群中における道具立ての優位性を示している。

広面遺跡では10基に認められるが、壺の約半数に施される周溝墓と、一割から二割の個体に施される周溝墓がある。また、Cブロックでは1基のもの



第23図 広面遺跡の出土器種

みに施されており、底部穿孔の行われないうブロックがある可能性も考えられる。底部穿孔には、ブロックの造営集団ごとの採否や執行方法の差があるものと考えられる。

群構成 比企地域の方形周溝墓群は弥生時代中期以来、後期、あるいは古墳時代前期に至るまで四隅切れの平面形態を呈するのが特徴である。前述のように、2〜3基を単位として、周溝の連接関係や連結関係が認められ、加えてこのまとまりを単位として土器配置が行われていることから、これを単位とすることは問題ないであろう。広面遺跡のような多数からなる周溝墓群は一見複雑に見えるが、中身は2〜3基のまとまりを基本に、それが複数集積してブロックが形成されている。また、広面遺跡ではSZ9が群構成全体に終始規制を与えている。こうした様相は単位墓である周溝墓、そのまとまりの単位墓群、その集積であるブロック、更にその上位にSZ9という構造を示していると考えていだろう。同様の指摘は既に柿沼幹夫が行っている(柿沼1996)。

だが、逆の見方をすれば、SZ9は墓域全体のブロックや単位墓群という枠組みそのものを壊しておらず、あくまでその内の一基に留まっているのである。最終的に他の周溝墓によって隠されてしまう姿

は、あたかも群全体から規制を受ける存在であるかのようなものである。柿沼はこうした大型墳墓が在来系大型壺を使用し、在来のものを否定しないことから、在来有力者層からの発展的分離を想定している（柿沼2007）。こうした、周辺の群構成を否定しないあり方は、同様のことを示しているのかも知れない。

当該地域の古墳時代前期の方形周溝墓の群構成を考える上で、こうした様相は示唆を与えるものといえよう。

土器配置 代正寺遺跡から広面遺跡に至るまで、個々の方形周溝墓の特定周溝への土器配置、また単位墓群全体を意識していると考えられる土器配置が確認できた。比企地域においては、この儀礼行為は方形周溝墓の導入時から最終段階まで行われ続けると考えられる。また、広面遺跡における南・西側周溝への集中、東側周溝における希薄さは、墓域全体がそうした方向から見られることを意識していると考えられる。

(6) 土器配置と群構成の継続性

平面形や群の規模の組み合わせ、土器の扱われ方については、これまで「土器Ⅰ～Ⅲ」で述べてきた。本稿の内容もそれらを大きく外れるものではない（註4）。

一方、本稿の目的である通時的な土器配置と群構成の把握については、各地の例で同様の作業が必要と考えられるため、地域間の様相を比較検討するのはその後に行うべきであろう。ここでは、この行為の継続性のみを取り上げて、若干の見通しを述べておきたい。

前述のように、比企地域においてはこうした群構成とそれと密接に関係する土器配置が、方形周溝墓の導入時から最終段階まで行われ続けている。やや詳しく述べると、2～3基を単位とする単位墓群、

その複合によるブロックと、個々の周溝墓、単位墓群、ブロックに対する正面観を意識した土器配置である。この土器配置は、かつて述べたように強く「群」を意識したものと考えられる。こうした様相が関東地方各地で一般的なものであるかについてはまだ検討が必要だが、大宮台地の井沼方遺跡、久台遺跡、武蔵野台地の丸山東遺跡でも確認していることから、その可能性がある程度高いといえよう。また、こうした群構成と土器配置の様相は、別墳を予定している弥生時代中期中葉の熊谷市小敷田遺跡、古墳時代中期中葉の深谷市戸森松原遺跡でも確認しており、確実とは言い切れないかもしれないが、関東地方における方形周溝墓の導入期から、埴輪祭式を執り行う後期古墳の登場まで継続するものと考えている。今後の作業によって、関東地方においては、こうした「群」を強く意識した造営を行う墓制として方形周溝墓を評価できることが予想される。

3. 方形周溝墓の造営集団

こうした群を強く意識した造墓集団とは、どのようなものであろうか。既に「土器使用」において、方形周溝墓と単位墓群が所謂親子関係を含むような「家族墓」ではなく、同世代の墓である「集団墓」である可能性を示した。とするならば、広面遺跡は同世代の単位墓群によって構成される、いくつかの集団による共同墓地であると考えざるを得ない。こうした集団の性格は、堅穴建物群の居住の様相と対照することにより明らかになるものと考えられる。

そうした同世代の造墓集団についてもう一つ問題となるのは、それが夫婦を核とするものであるのか否かということである。

ここで思い出したいのが、関東地方における中心埋葬施設が基本的に1基（単数）であることである。単数埋葬の卓越は、この墓制が関東地方に導入され

た当初からの関東地方の特徴の一つである。伊藤敏行(伊藤1986・1988)や長瀬出(長瀬1997)、筆者(福田1999)が示したように、実際に埋葬施設が検出されている場合でも複数埋葬はほとんど見られない。これまでの検討で明らかになってきた周溝墓への複数回の土器配置が複数埋葬の可能性を示唆するが、例えば広面遺跡では全体の約22パーセント(5例)にしか過ぎない。また、確実な複数埋葬の場合には、上尾市葉師耕地前遺跡(赤石1978)のように長方形に方台部を拡張する場合が見られるが、そうした例はごくまれである。従って、夫婦を対等なものとし、基本的な単位とするような埋葬は可能性としては想定し辛いと考えられる。

2007年近畿弥生の会による『墓制から弥生社会を考える』が上梓され、実に多くの新たな見解と問題提起が行われた。中でも造営集団については、大庭重信、中村大介によって埋葬施設や埋葬空間のあり方から、これまで家族とされる場合の多かった造営集団が、クランのような出自集団として捉え直されている(大庭2007、中村2007)のは注目される。これは九州の甕棺墓における田中良之(田中1998・2000)、溝口孝司(2000・2001)らの研究とも重なり合う認識である。近畿地方や九州地方の研究については、充分その内容について検討を尽くしていないため本稿では評価は避けるが、そうした集団の性格も常に考慮に入れておかねばならないだろう。仮に、方形周溝墓の造営集団がそうした出自集団であるならば、その分布域における社会像は大きく変わるかもしれない。慎重を期したい。

前述のように残念ながら関東地方では方台部に中心埋葬施設が残されている場合はまれで、直接それをもとにした対比、例えば畿内地方との対比は困難である。だが、周溝からの土器の出土は全国的にも共通した要素であることは、かつて述べたとおりで

ある(福田2005a)。こうした各地の土器配置の様相を明らかにしていくことで、中心埋葬施設と対になるような対比が可能になると考えられる。本稿のような検討は、同様の方法では検討できない関東地方において、全く別の角度からこうした問題に言及できる可能性を開くものと考えている。

前述のように、関東地方では導入期から本格的に埴輪祭りが展開する古墳時代中期まで、方形周溝墓の「群」を意識した造営が一貫して行われている。大型墳墓が同一墓域内にあっても、群馬県下郷遺跡や千葉県原市草刈遺跡で見られるように前方後円墳や前方後方墳が同一墓域内にあってもそのことは変わらない。上位にそうした墳墓が存在すること、「群」は話が別であるかのようである。仮に造営集団が当時の基本的な社会集団であるならば、関東地方では古墳時代中期に至るまで、集落での生活、集団の構造を変えるような大きな変革はなかったことが予想される。具体的に、それが何かを述べる用意はまだないが、今後可能性を探っていかねばならないだろう。

4. 結語

以上、比企地域における方形周溝墓の土器配置と群構成について検討を行い、その継続性を確認するとともに造営集団について若干の考察を行った。

ここでは、今後の課題を確認することにした。一地域ではあるが土器配置や群構成について、通時的な継続性が確認できたため、前掲のように他地域における通時的な様相を確認し、こうした土器配置や群構成を始めとする諸要素について比較を行う必要がある。具体的には、弥生時代後期後半の様相が今一つ不明瞭だが、最古と最新の方形周溝墓がある妻沼低地や、作業を一部行っている大宮台地や武蔵野台地について取り扱うことになる。いずれにせ

よ、空間的な広がりの中で更にどのような地域差が確認できるのか検討する必要がある。比企地域ならば四隅切れの平面形と後期後半における甕の卓越、古墳時代前期の穿孔土器の多さが特徴としてあげられる。土器Ⅰ～Ⅲで示した地域差と合わせて、今後検討していくことにしたい。

底部穿孔土器については、特に広面遺跡においてブロックごとの差異が見られ、造営集団の具体的な儀礼の執行方法の違いを示すものと考えられる。井沼方遺跡では西側のA・B群で多く見られる(5基)が、東側のE・F群では少ない(2基)。こうした様相の確認により、より具体的な差異が抽出できるであろう。底部穿孔土器については、中村大介により出自集団の差を示す可能性が指摘されている(秋山・中村2004)。そうした様相との比較も必要である。

また、本稿では造墓集団についてある程度推定してみたが、それらは集落の分析から得られる集団像との対比が必要であろう。得てして、この手の作業はうまくいかない場合が多いようだが、井沼方遺跡

などのように集落と墓域の対応が明らかな遺跡もあることから、決して無意味とは思われない。両者の対応はやはり確認すべき事柄である。

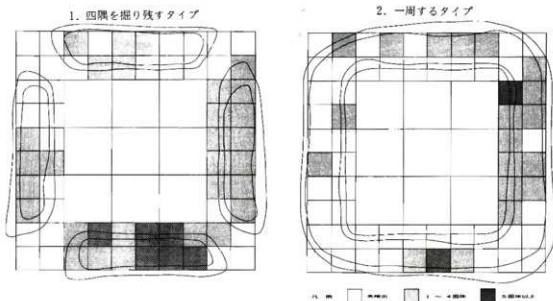
最後になるが、本稿で対象とした広面遺跡と中耕遺跡について、石坂俊郎氏が検討を始めている(石坂2008)。未了であるため本稿では触れていないが、併読されたい。

以上の課題を踏まえた上で、造墓集団像とそれをもとにした社会構造の継続性と変革、東海地方や近畿地方との関係について検討したいと考えている。大方の御意見とご批判をいただければ幸いである。

(2008年6月17日 記)

謝辞

本稿を草するに当たり、代正寺・花影・広面遺跡の資料の観察については、さきたま史跡の博物館と栗岡潤氏にお世話になった。また、終遺跡の資料については坂戸市教育委員会加藤恭明氏の御厚意で実見させて頂いた。方形周溝墓研究会の方々にはいつ



第24図 広面遺跡・周溝形態による出土頻度(村田1990より転載)

また、本稿はパネラーとして参加する予定であった福井県鯖江市主催の研究フォーラム「方形周溝墓の埋葬原理」で発表する予定の内容の一部を原稿化したものである。個人的な事情で参加できなくなりました。教育委員会担当の前田清彦氏をはじめ、

コーディネーターの肥後弘幸氏、パネラーの石黒立人、大庭重信、藤井整、若林邦彦、後川直太郎の各氏には多大なご迷惑をおかけした。お詫びするとともに、本稿が少しでもその償いになれば幸いである。

註

- 1 関東地方における方形周溝墓の群構成については伊藤敏行が岩松保(1992a・b)の群構成のモデルをもとに、次のように整理している。
 - (1) 埋葬墓 周溝墓個々の埋葬施設
 - (2) 単位墓 一つの周溝墓。埋葬墓の集合体。単数埋葬の場合には単位墓は区画を有する埋葬墓と考えられる。
 - (3) 単位墓群 単位墓の集合体。①ごく少数(2~3基)の切りあいを有するグループを含んだもの。単位墓を基本とする。②切り合い関係はないが、方向、規模等に共通性があり近接して展開する。
 - (4) 小墓域・墓域 ①ブロック 単位墓群の集合体。切り合い関係や周溝の接続等の共通性の高い2~3基の単位墓群からなる。墓域により分割される一群である。②小墓域(ブロック群) ブロックの集合体。③墓域 小墓域の集合体。集落の周囲に形成される墓群の全体。本稿では、この伊藤の分類に基づき「単位墓」「単位墓群」「ブロック」という呼称を用いる。
- 2 壺の大きさについては、特に器高50cmを超えるような大型のものについて検討が加えられている。(青木1994、早坂2004、柿沼2006)。また焼成前穿孔孔壺は中型のものが多いこともよく知られている。本稿では、器高40cm以上のものを超大型壺、30cm以上のものを大型壺、20cm以上のものを中型壺、10cm以上のものを小型壺、それ以下のものをミニチュアとした。
- 3 村田は周溝墓の平面形態ごとの出土状況についてもまとめている(第24図) 村田1990 pp.137-17~32)。
 - (1) 四隅を掘り残すタイプでは南溝中央および南コーナーの陸橋部周辺に集中する。全体的に完形度は高い。層位的には、墳丘(方台部)側からの流れに包含される。床直状の出土遺物は、破砕七器と思われる壺形土器の破片が主体である。(SZ 3、5、6、10、11、13~15、17~20)
 - (2) 溝が一周するタイプでは各コーナーは余り意識されず、南および西溝、更に北溝の中央にブロック状に出土している。層位的には、墳丘の崩落による埋没が一定期間進んだ後の層に包含されている。(SZ 1、2、4、8、16、22)
 - (3) 方台部の一辺の中央に陸橋をもつタイプは、陸橋の東にセット関係を有する土器群の出土がある反面、北溝あるいは北東コーナーに単体で出土する傾向がある。方台部側、あるいは陸橋部からの転倒が予想される。土器の混入は、溝の埋没がかなり進んだ後と考えられる。(SZ 7、12、21)
 - (4) 方台部に突出部を複数もち、非対称な陸橋を有するタイプである。遺物は、陸橋中央および南側突出部の周囲に散漫な分布を示す。溝深度の高い南溝では大型の壺形土器が多数の破片となって方台部から流入しており、小型の完形の土器も混在している。この場合も溝の埋没からかなり進んだ段階と思われる。
- 4 「土器Ⅱ」では、弥生時代中期中葉から継続する底面へ入れられる。破砕される、流れ込む場合に加え、中期後葉では歳勝土、常代、代正寺の各遺跡で周溝埋没直前に置かれる方法が加わることを確認した。また、器種構成では壺が卓越する歳勝土、常代とそれ以外の器種を含む遺跡があり、道具立てに違いがある可能性がある。

参考・引用文献

- 赤石光實 1978 『業師耕地前遺跡』上尾市文化財調査報告第4集 上尾市教育委員会
- 青木義徳 1994 『各論…方形周溝墓出土の大型壺をめぐって』『井沼方遺跡発掘調査報告書(第12次)』pp.188~190 浦和市遺跡調査会調査報告書第185集 浦和市遺跡調査会
- 石坂俊郎 2008 『中耕へ広面遺跡墳墓群と供献土器(1)』『埼玉県立史跡の博物館紀要第2号』pp.1~16 埼玉県立史跡の博物館
- 伊藤敏行 1986 『東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ』『研究論集Ⅳ』pp.43~89 勸業東京都埋蔵文化財センター
- 伊藤敏行 1988 『東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅱ』『研究論集Ⅴ』pp.1~69 勸業東京都埋蔵文化財センター
- 伊藤敏行 1996 『群像論』『関東の方形周溝墓』pp.331~347 同成社
- 岩松保 1992ab 『墓域の中の集団構成(前編)一近畿地方の周溝墓群の分析を通じて一』『京都府埋蔵文化財情報第44号』

- pp.14~24 東京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 岩松 保 1992b 「墓域の中の集団構成（後期）—近畿地方の周溝墓群の分析を通じて—」『京都府埋蔵文化財情報第45号』pp.1~15 東京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 大庭重信 2005 「方形周溝墓の埋葬原理」『考古学ジャーナルNo.534』pp.5~8 ニューサイエンス社
- 大庭重信 2007 「方形周溝墓の埋葬原理とその変遷—河内地域を中心に—」『墓制から弥生社会を考える』pp.53~70 六一書房
- 柿沼幹夫 2007 「(2) 方形周溝墓・土塚墓・土器棺墓」『埼玉の弥生時代』pp.124~149 六一書房
- 加藤恭朗・坂野千登勢 2001 「終遺跡—終遺跡発掘調査報告書I（第1分冊）」坂戸市教育委員会
- 木村俊彦 1986 「滑川町新井打越遺跡の調査」『第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨』pp.14~15 埼玉考古学会
- 近畿弥生の会 2007 「墓制から弥生社会を考える」六一書房
- 鈴木孝之 1991 「代正寺・大西」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中良之 1995 「古墳時代親族構造の研究」柏書房
- 1998 「出自表示論批判」『日本考古学第5号』pp.1~17 日本考古学協会
- 谷井 彪 1974 「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
- 長瀬 出 2000 「関東地方における方形周溝墓の方台部被葬者の検討」『法政考古学第23集』pp.27~54 法政考古学会
- 中村大介・秋山浩三 2004 「方形周溝墓研究と近畿弥生社会復元への展望」『瓜生堂遺跡I—考察・分析・写真図版編—』pp.499~542 勉大府文化財センター
- 中村大介 2007 「方形周溝墓の系譜とその社会」『墓制から弥生社会を考える』pp.73~120 六一書房
- 早坂廣人 2004 「みずほの台地の弥生のくらし」pp.14~15 富士見市立水子貝塚資料館
- 福田 聖 1995 「方形周溝墓と土器I」『研究紀要第11号』pp.1~54 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 聖 1999 「V 結語 2. 古墳時代」『上ノ宮遺跡』pp.90~98 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第252集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 聖 2000 「方形周溝墓の再発見」同成社
- 福田 聖 2004 「方形周溝墓と土器II」『研究紀要第19号』pp.133~168 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 聖 2005 a 「方形周溝墓における共通性」『考古学ジャーナルNo.534』pp.22~25 ニューサイエンス社
- 福田 聖 2005 b 「方形周溝墓と土器III」『研究紀要第20号』pp.57~76 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 聖 2007 a 「方形周溝墓における土器使用と群構成」『原始・古代日本の祭祀』pp.30~69 同成社
- 福田 聖 2007 b 「井沼方遺跡における方形周溝墓の土器配置と群構成」『埼玉の弥生時代』pp.379~396 六一書房
- 福田 聖 2007 c 「V まとめ 3. 古墳時代について」『久台遺跡III』pp.324~327 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第339集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮島秀夫 1995 「銅鐙・鉄剣出土の方形周溝墓 観音寺遺跡4号方形周溝墓」『比企丘陵創刊号』pp.75~85 比企丘陵文化研究会
- 溝口孝司 2000 「墓地と埋葬行為の変遷」『古墳時代像を見なおす』pp.201~274 青木書店
- 溝口孝司 2006 「西からの視点」『シンポジウム記録5 畿内弥生社会像の再検討』pp.29~58 考古学研究会
- 村田健二 1990 「広面遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山岸良二（編）1996 「関東の方形周溝墓」同成社
- 山岸良二（編）2005 「方形周溝墓研究の今」雄山閣出版

研究紀要 第23号

2008

平成20年8月21日 印刷

平成20年8月28日 発行

発行 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4-4-1

<http://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社